

1 e-チカラ

No. 4

おばあちゃんへの祈り

○ 〇
ご本部への団体参拝が終わった翌日、私は早速お土産を持って、息子の家を訪問しました。

私の家と息子の家は電車で二駅と近いのですが、案外に顔を合わせる機会がありません。

久しぶりに孫の浩太にも会えるかなと楽しみにしていましたが、浩太は友達と釣りに出かけていて、ちよつと残念でした。でも、元気なら何よりの思いました。

お土産の金光饅頭を渡すと嫁の由美さんが、ご霊前にお供えして、それから、私と息子夫婦もおいしいお茶と一緒にいただきました。

「せつかくおかあさんが来てくださったのに、浩太が出かけてしまって申し訳ないですね」と、由美さんは申し訳なさそうに言いました。

「いえいえ、浩太が友達と出かけるなんて、本当にうれしいわ」。

私が、うれしいというのには訳があるのです。

○ 〇
二年前のことです。

浩太の小学校の卒業式直後に、息子一家が引越しをして、学区の異なる場所で暮らすことになったのです。今まで仲の良かった友達と別れ、誰も友達のない中学校へ入学したのです。だから私は、浩太がいじめに合うのではないかと、とても心配でなりませんでした。

毎日、神様へお願いさせていたしながらも、「大丈夫かな」と、いつもいつも心配しながら日々を過ごしていました。だから、今日こうして友達と仲良く出かけていることを聞かされ、とてもうれしく思ったのです。

○ 〇
「おかあさん、うれしい話をもう一つ。浩太ね、すぐくい子に育っているんだよ」と、息子はニコニコと、先日の浩太たちの修学旅行の話をしてくれました。

中学二年の秋は、二泊三日の修学旅行へ行くことになっていました。

クラス中の皆が、その日を待ち遠しく楽しみにして、班を決めたり自由行動の行き先を決めたり、お土産を誰に買おうかなど、と大いに盛り上がっていました。

浩太も、もちろん友人と一緒にワイワイと大騒ぎをしていたのですが、ふと、B君のことが頭をよぎったのでした。B君は、二学期になってから、登校しなくなっていたのです。

浩太は、何とか修学旅行には一緒に行きたいと思っただようで、担任の先生に相談に行きました。先生は、「君が誘いに行ってくれるのか。よし、君に任せよう」と言ってくれたそうです。

○

浩太は早速B君の家を訪ねて、「せっかくだから一緒に行こう」と誘ったのですが、なかなか行こうという気にはなれなかったようでした。でも、浩太が二度、三度と誘ううちに、だんだんと顔の表情も明るくなり、結局、皆と一緒に参加することになったのです。

旅行の間、B君がほかの友人達と楽しそうにしている様子を見て、浩太は思い切ってB君を誘って本当によかったと思っただようです。

私はその話に、思わず胸が一杯になりました。ほかの友人の中にも、B君と一緒に修学旅行に行けばいいのと思った人はいったと思います。

浩太はどちらかと言えば、内向的な性格なのですが、勇気を出してB君の家まで誘いに行ってくれたことは本当にうれしく、自分の孫ながら心の中で拍手したいような気持ちになりました。

○

続けて息子は、こうも話してくれました。

「おかあさん、毎日朝参りして、僕たち家族のこともお祈りしてくれているんだよね。ありがとう。まだ、今は日参したり、御用奉仕したりはあまりないけれど、今度三人でお参りに行って来ようと思っっているよ」。

私は、息子の言葉にうなずきながら、一層息子家族が、神様にお育ていただきませうようにと、改めて思うのでした。



今さら聞けない金光教のギモン



「奥城ってなあに？」

—教会の奥城にて、母子の会話—

さつき 「ねえ、お母さんこの漢字は何て読むの？」

お母さん 「これはね、おくつきと読むんだよ」

さつき 「へ～、お城って書くのに、シンデレラ城みたいじゃないね？」

お母さん 「ここはね、さつきちゃんも可愛がってもらった、教会の前の先生
(先代)のお墓なんだよ」

さつき 「でもなんでお城ってつくの？」

お母さん 「うーん、なんでだろうね・・・じゃあ、一緒に教会へ行って先生
に聞いてみようか？」

—後日、教会にて—

お母さん 「先生、奥城にはどういう意味があるのですか？」

先 生 「奥城にはね、亡くなった人のお骨が埋葬されていて、奥という字
は奥深いという意味。城は壁などで四方を囲むという意味で柩
(ひつぎ)を表しているんだよ」

お母さん 「へー、そういう意味だったんですね」
「さつき、わかった？奥城には先生のお骨が入っているんだって」

先 生 「そうだよ、奥城にも前の先生はいるんだよ。よく、さつきちゃん
は先生に色々お話してくれたよね。だから、これまでみたいに先

生の奥城に向かって、お家や学校であったことを話してあげたら、きっと先生は喜んでフンフンと聞いてくれるよ」

お母さん「さつき、よかったね」

さつき 「うん」

先生 「前の先生も、さつきちゃんのおじいちゃん、おばあちゃんも、私たちのことを大切に思い祈ってくれていたんだよ。だから、おじいちゃん、おばあちゃんたちへ、これまでのご恩を思ってお参りしましょうね」

お母さん「そうですね。そこが大事ですよね」

先生 「さつきちゃん。たとえばお友達が学校をお休みしたら、心配でその子のお家へお見舞いに行くよね？」

さつき 「うん」

先生 「逆に、さつきちゃんがお休みしたときは、そのお友達がお見舞いに来てくれて、その日に学校であった出来事などを話してくれたらうれしいよね。それで、今まで以上にその子のこと好きになって仲良くなれるんじゃないかな？お墓参りも同じで、そこにいる人のことを思って、何でもお話ししてあげたらいいんだよ」

さつき 「うん、わかったよ先生。さつき、これからそうしてみる」

お母さん「じゃあ、また一緒に奥城にお参りいこうね」

さつき 「でも、私もお城でお姫様になりたーい」

お母さん「こら、さつき！」

自己肯定感

「わたしは、ここにいていいんだ」

こう感じられることを「自己肯定感」と言うそうです。「ここにいていいんだ」と感じられる。ごく普通のことのようですが、この「自己肯定感」を感じられない子どもが増えていると聞きました。そうだとすれば、とても悲しいことです。

ある小学校の女性教師が、こんな話を聞かせてくれました。

○

私の担任するクラスにA君という子がいます。この子は、小学校五年生だというのに、三年生で習った割り算が十分にできません。また、五年生で新しく習った漢字もほとんど書けません。勉強に自信がないためか、いつも暗い顔をしてうつむいています。

しかしA君は、毎日給食の後で、給食当番でなくても、配膳台の周りにちらかったゴミを、黙って拾ってくれます。

私は、ある日、「A君、いつもありがとうね。ほんとに助かるわ」とお礼を言いました。するとA君は、恥ずかしそうに目を伏せました。そして、「先生、ぼくって必要？」と私に聞いたのです。

私は、その言葉に「ズキッ」と心が痛みました。そして「もちろんだよ。A君がいないと、先生困るよ」と話しました。するとA君は、とても嬉しそうに微笑んだのでした。

A君は、それから少しずつ変わっていきました。表情が明るくなり、伏目がちだったのが、まっすぐ前を向くようになりました。それまでは、宿題をまったくやらない子でしたが、少しずつやってくるようになりました。そして、苦手の漢字テストの前日には一生懸命に勉強したのでしよう、百点満点を取ったのでした。

○

「こんなぼくでも先生に必要とされている」「ぼくはここにいていいんだ」という「自己肯定感」が生まれたことで、A君は大きく変わることができたのです。人生の一大転機と言っても言い過ぎではないでしょう。



これは子どもだけのことではないと思います。大人も子どもも、「自分は必要とされていない」と感じるほど、悲しく寂しいことはありません。生きている命の価値が問題にされているのですから。

神様の切なる願いは、赤ちゃんからお年寄りまで、私たちみんなが、命あるかぎり「自己肯定感」を感じられる場所が生まれることです。

さて私たちの家庭はどうでしょう。家族一人ひとりが、「自己肯定感」を感じられる家庭になっているでしょうか。また、私たちがお参りしている教会はどうでしょう。お参りしてきた人がみんな、居心地のよさを感じられる教会になっているでしょうか。

もしそうならないと感じたら、神様にお願ひし、教会でお取次を頂いて、自ら進んで、居心地のよくなるような改まりを進めていきましょう。

先生へのラブレター

K君は地元の大学に通う大学生です。

金光教の信心のある家に生まれましたが、神様のことはあんまり好きになれません。それというのも、あの言葉が原因でした。それは、「神様のおかげ」という言葉です。

K君はことあるごとに、「神様のおかげ！」と言われて育ってきました。大学に合格したときも、親の第一声は「神様のおかげ！」。頑張って勉強してテストの点が良くて、「神様のおかげ！」。K君は、「なんだよ、僕が頑張ってきたからじゃないか」と、面白くないと思っていたのです。

○

大学に入って、初めての夏。大学のテストの時期でした。K君は勉強に勉強を重ね、準備は万端。後は当日を迎えるだけだと思気込んでいました。

ところが、テストの直前になって、脇腹に虫さされのような発疹ができ、ちくちくとした痛みが出てきました。そして、それはだんだんとズキズキとした痛み

に変わってきました。

K君が病院に行くと、「帯状疱疹」という病気でした。そして、「他の人にうつるので、学校に行ってはいけません」とお医者さんに言われてしまったのでした。K君はテストが受けられず、一ヶ月ほど痛みに耐えながら、家にこもる生活が続きました。

○

一ヶ月後、すっかり病気が治ったK君は、再試験をうけることになりました。

ところが、いざ試験が始まると困ったことが。テストの問題用紙を見ると、まったく聞いたこともない内容ばかりなのです。先生が「ここはテストに出る」と言っていた問題はどこにもなく、授業でも出てこなかった内容がびっしりでした。K君は「再試験では問題が変わるのは当然だけど、習ってもいない内容が出るなんて・・・」と困り果てました。

試験時間が半分過ぎても、解答用紙は真っ白のまま。K君は色々な思いが巡っていました。

「あんなに勉強したのに」

「元々のテスト内容なら出来たはずなのに」

そんな文句ばかりが出てきます。

そして、テストが終わる15分前になって、K君はふ

と、テスト用紙に大きく「裏を見てください」と書き込み、テスト用紙をひっくり返しました。「真っ白なテストを提出して、『何も勉強していないな』と思われるのはしゃくだ。どうせなら、出ると言われていた内容を全部書いてやろう」と思ったのです。

K君はテスト用紙の裏面にどんどんと書き込み始めました。テストに出ると言われていた内容はもちろん、出さないと言われていた授業の内容。どの授業が面白かったか。先生が授業中に言った冗談まで、思い出せるだけ、どんどん書いていきました。

そうしていくうちに、さきほどまで文句ばかりだったK君の気持ちが無意識なことに落ち着いてきました。最初は「どうだ、これだけちゃんと勉強してきたんだぞ」と思って書き殴るように書いていたのですが、どんどん書き込んでいる内に「〜ということを勉強させてもらいました」という文章に自然となっていたことに気がつきました。K君は書き終わって真っ黒になった用紙を見て、「ああ、『させてもらっていた』んだ」と初めて思ったのでした。

終了時間のぎりぎり最後に、K君はこう付け足しました。

「問題は解けなかったけれど、本当にたくさんのこと



を勉強させてもらっていました。先生、ありがとうございます。
「ごいます。神様に感謝します」

後日、テストの結果が発表されました。K君は、無事、合格していました。それから、K君は、「神様のおかげ」と自分から言うようになったのでした。

余談ですが、その先生は毎年、新入生にこの話を「テスト裏のラブレター」と言って話しているそうですよ。

○編集後記

今号のe-チカラは、子供の成長を見守る大人向けの文章を掲載してみました。私自身、ついつい口が先にでてしまうのですが、改めて、まずは神様に祈りを持つことの大切さを教えられた内容です。

「今さら聞けない金光教」では、教会奥城をテーマにしてみました。昨今、お墓参りやお墓の必要性など、様々なところでも取り上げられていますが、子供にも分かりやすく本教の考え、教えを盛り込んだ内容となっています。

また、好評企画である「クッキング」のコーナーでは、子供が大好きなチョコレートとプリンを使ったお菓子を紹介しています。ぜひ、レシピを参考に作ってみてくださいね♪

e - チカラ 第4号 平成30年 2月27日発行

金光教名古屋センター 発行者 石黒眞樹

〒451-0043 名古屋市西区新道1-26-13

TEL 052-433-8181 FAX 052-571-8007

☆ マシュマロトリュフ ☆



材料

- ・ マシュマロ 50 g
- ・ 板チョコ 50 g
- ・ チョコチップクッキー 3枚程度
- ・ ナッツ類 少量

作り方

- ① 板チョコ、ナッツ類は細かく刻んでおく。
チョコチップクッキーも1cm角に刻んでおく。
 - ② 耐熱ボウルに、マシュマロと板チョコを入れて
レンジで2分温める。
 - ③ マシュマロと板チョコが溶けたらよく混ぜ合わせる。
(溶けないときは、様子を見ながら1～2分追加で温める)
 - ③ 素早くチョコチップクッキーとナッツ類を混ぜ合わせ、
手のひらで一口大に丸め、カップに入れる。
仕上げにココアをまぶす。
- [※注] 冷えるとすぐに固まってしまうよ！

♪ とっても簡単 もちもちマフィン ♪



材料

- ・ プリン 1パック（3連パック）
- ・ ホットケーキの素 150g

作り方

- ① プリン3個をボウルに入れ、泡立て器でよく混ぜ合わせる。
- ② ホットケーキの素を①のボールに合わせ、カップに入れる。
（生地がヒラヒラと落ちるやわらかさにする）
- ③ オーブン（170℃）で15分焼く。
（トースターの場合も15分）

※ トッピングにナッツ類、レーズンなどを飾るとかわいく
なるよ！